

受難節に入った。十字架への坂道を自転車に乗ってゆっくり下って行こう。十字架に近づくほど速度は増して振動も激しくなるが、今日は静かに動き始めたばかり。それでも不穏な空気は感じられる。

「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた(ルカ 22:1)」。元来この二つの祭りは別もので、過越祭は牧畜由来、除酵祭は農耕由来の祭儀だとされている。

牧畜と農耕、異なる二つの祭りエネルギーが集約されて緊張を高める様は、あたかもイエスに殺意を抱く二大政治勢力と相似形に見える。

「祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた(22:2)」。

祭司長らサドカイ派は、ローマ帝国におもねる神殿の特権階級。律法学者らファリサイ派は、帝国の支配に反発するストイックな原理主義。彼らは最高法院の二大勢力で、普段は仲悪く、聖書理解も相当違っていた。

そんな彼らが、イエスの殺害ということにおいて、二つの祭りのごとく一つに束ねられた。

無名のラビ、イエスの何がそんなに目障りだったのか。「彼らは民衆を恐れていた(22:2b)」。民衆の何を恐れていたのか。群衆の蜂起か、世の変革か。それもあろう。しかしその根っこには劣等感や逆恨みがあったのではないか。

「民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていた(19:48)」ので彼らは手出しできなかった(19:47~48)。民衆の熱狂は「神の御心」だと感じていた。だが神の御心よりも、人間の権力や権威にしがみついている自らの負い目が、彼らをヒステリックに逆走させた。

過越祭には主のために羊か牛を屠る(申命 16:2)。「その際、酵母入りのパンを食べてはならない。七日間、酵母を入れない苦しみのパンを食べなさい(16:3)」。何のためにか。「エジプトの国から出た日を生涯思い起こす(16:3b)」ために、苦しみのパンを食べて自由であることを祝う。

牧畜的な過越祭においては「家畜の犠牲」で、農耕的な除酵祭においては「苦しみのパン」をくり返し食べることで、自分という存在の尊さを確かめる。

祭りは、人間の深層を狂気と共に揺さぶって、存在の始原を再燃させる。自分が何によって存在し、解放され、救われたかを再燃させる、共同体の特別な瞬間なのだ。

「過越祭と言われている除酵祭が近づいていた(ルカ 22:1)」。すなわち、「十字架」が近づいていた。過越祭・除酵祭にイエスは十字架で犠牲になる。一匹の羊として、人々の苦しみのパンとして。

「あなたの神、主があなたがたをエジプトから導き出す(申命 16:1)」犠牲となって私たちに解き放つために。「エジプト」とは何か。イエスの言葉やふるまいを抑え込もうとする力。人間の可能性、個別の自由な姿を抑圧する力。もっと言えば、神の息である命の永遠性を、虚しく死に渡してしまう罪の力だ。

エジプトで民の祖先は奴隷であった。奴隷には冒険もなく、責任もなく、迷いがあってもいけない。

使徒の一人イスカリオテのユダは奴隷ではない。彼の中には「サタンが入った(ルカ 22:3)」が、機械のように操作されたわけではない。「イエスを引き渡そう(22:4)」とは、ユダの傲慢と軽率さが、サタンに「見込まれて」露わにされた彼自身の意志。

奴隷なら責任はないが、自由人には責任がある。ユダがどう裁かれるか、イエスに祈られて赦されるのか(23:34)。人間には分かり得ない神の判断だ。

私たちは「苦しみのパン」を苦菜と一緒に食べ(出エジプト 12:8)、死からも自由であることを喜ぶ。



《おまけのひとこと》

それでも自由がいい 責任を負い たとえ安寧でなくとも 苦しみのパンを食べる私の自由がいい
聖餐のパンと葡萄酒は無味無臭 責任を負う自由人が辛抱強く噛みしめてこそ 救いの味が現れる